

精神医療技術を通じた自己形成に関する社会学的研究 ——薬物療法・精神療法の利用者の観点から——

東京大学 榎原克哉

1 目的

本報告の目的は、社会関係によって構成される前段階の自己を、人間の「内面」(人格、精神など)という観点から明らかにすることにある。本報告は、社会関係に参加すること自体に困難を覚えた人々の経験に着目する。そして、精神医療技術(薬物療法と精神療法)に代表される技術的介入を通じて、自身の「内面」を改変しようとする人々の実践や自己理解の様態を考察する。

精神医学や心理学の技術や知識(“psy disciplines”)と主体の問題については、N.ローズの統治論において中心的に議論がなされてきたが、とりわけ近年の議論で強調されているのは、“psy disciplines”の「フラット化」という現象、すなわち人間の「内面」への介入よりも、脳を中心とした生物学的アプローチや可視的な行動の矯正といった介入が重点的に行われるようになったという事態である。本報告は、ローズの指摘を踏まえたうえで、その統治の作動様式を経験的な観点から明らかにすることを目的とする。

2 方法

したがって、精神医療機関への通院経験のある6名に対して、インタビュー調査を実施した。インタビュー内容は主に、(1)現在・過去における精神的な問題の内容、(2)その問題を意識するようになるまでの過程、(3)医療機関に通院するまでの経緯、(4)医療機関で受けた治療に対する印象・評価などから構成されている。

3 結果

分析の結果、(1)全人格型の語り、(2)場面型の語り、(3)想像型の語りの3類型を導出した。(1)「全人格型の語り」は、幼少期からの「トラウマ」や「抑圧」といった精神分析的なテーマと親和性を示し、治療対象として自身の人格を包括的に捉える傾向を示した。(2)「場面型の語り」は、治療対象を特定の社会環境(職場など)への適応といった文脈から限定的に組織し、適応の妨げになる自身の内面特性を矯正しようとする傾向を示した。(3)「想像型の語り」は、特定の社会環境への適応という文脈を超えて、自身の将来的な可能性としてイメージされるもの(転職など)の阻害要因として、自身の内面を捉える傾向を示した。

個人が3つの語りを互換的に用いることもあり、それぞれの語りが自身の「内面」への技術的介入を促進する役割を果たしている様子が、本分析から観察された。「全人格型の語り」は、治療対象を広範な文脈から組織し治療の原動力として作用する一方で、「場面型の語り」はそれらの問題を特定の社会環境に焦点化し、具体的な矯正へと架橋する役割を果たす。また「想像型の語り」は、精神医学がもたらす肯定的な人間像というイメージのもと、現在の社会環境を超えた地点に治療対象を組織させる作用を有することが確認された。

4 結論

以上の調査から、ローズが「フラット化」として想定した現代の精神医学の統治様態は、経験レベルにおいてはより複雑な形で作動していることが看取された。すなわち、従来の精神分析的アプローチの残存という現象と生物学的アプローチの浸透という現象の、両者が併存する精神医学内部の分断構造は、「意図せざる結果」として“psy disciplines”の中に人々を引き込み、その中から抜けがたくさせる構造を有していることが明らかにされた。

文献

- Rose, Nikolas, 2001, “The Neurochemical Self and its Anomalies,” Ericson V. Richard and Doyle Aaron eds, *Risk and Morality*, Toronto: University of Toronto Press: 407-437.
———, 2003, “Neurochemical Selves,” *Society*, 41(1): 46-59.